

討論：疎外の時代の市民社会に関する実証的検討

2023年度 日本政治学会総会・研究大会

そ ん じ え ひ よ ん
SONG JAEHYUN
関西大学

2023-09-17

岡田・浅野報告

概要（岡田・浅野報告）

- **問い**：政治的疎外感（political alienation）の主要な意味次元が時代や国によってどの程度異なるか。
- **方法**：JES / ANESデータを用いた動的因子分析（dynamic factor analysis）
- **答え**
 - 日米比較
 - 日本：政治の出力過程（制度信頼など）から疎外を判断
 - アメリカ：政治の入力過程（無力感、政治家信頼など）から疎外を判断
 - 時系列
 - 日本：制度信頼に加え（主要次元だが影響力は低下傾向?）、政治的無力感の影響力↑
 - アメリカ：政治的無力感、政治的無関心の影響力↓
 - 世代間
 - 日本：政治的無力感・制度信頼における世代間の違い
 - アメリカ：世代間の違いは確認されず

貢献・意義（岡田・浅野報告）

- 研究の位置づけ
 - 既存の研究：「政治的疎外感の構成要素」から「各構成要素に関する研究」へ
 - ⇒**本報告**：各構成要素の相对比较（国家間、経時的、世代間）
 - 政治的無力感（内的政治的有効性感覚）
 - 政治的無規範性（制度信頼、外的政治的有効性感覚）
 - 政治的無関心
- 政治的疎外感の増大は何を意味するか。
 - 既存の見方：民主主義の危機
 - ⇒**本報告**：必ずしも「民主主義の危機」とは断定できない。
 - 政治的疎外感の増加が持つ意味は、国家間、時代間、世代間で異なるため

質問・コメント（岡田・浅野報告）

1. 探索的分析の性格が強いため、今後の展開に期待
 - 変化、分散、違いをどう説明するか。
2. 政治的疎外感（潜在変数、因子得点）の経時的変化は？
3. 政治的疎外感をXとした場合、あるY（投票参加等）に与える影響は国家間・時代間・世代間で異なるか。
 - もし、異なる場合、これは疎外感の意味次元の変化がもたらしたものか。
4. 政治的疎外感の増大が必ずしも「民主主義の危機」を意味するわけではないらしいが…
 - それでも「政治的無力感」、「政治的無規範性」、「政治的無関心」いずれの次元も民主主義にとっては重要なのでは？
5. 日米比較の意味
 - この「比較」から何が言えるだろうか（=違いをどう説明し、どういう含意があるか）。
 - 探索的分析なので今回はここまでは不要かも
 - 例）アメリカにおいて制度信頼次元の重要性が低いのは、アメリカのnationを形成する上で「民主主義」の概念が重要だったから～

寺下報告

概要（寺下報告）

- **問い**：韓国における主要な抗議行動と主要政治的イベント（選挙、政権交代等）の関係は？
- **方法**：新聞記事（計39社; 2000～2022年）を用いた半自動化抗議イベント分析（semi-automated protest event analysis; naive bayes分類器）
- **答え**
 - 機械的に推定された講義イベントは公的データのトレンドを追従
 - 大統領選挙・政権交代と抗議イベントの頻度間の関係は確認されず
 - 災害（新型コロナ）・自然現象（天気）と抗議イベントの頻度間の関係は確認される。

貢献・意義（寺下報告）

- 新聞社ごとのイデオロギーの偏りによるバイアス
 - 韓国）朝鮮・中央・東亜 → 保守 / ハンギョレ・京郷・OhmyNews → 革新（進歩）
 - ⇒**本報告**：地方紙を含む39社の新聞記事を取得
- ヒューマンコーディングの限界
 - ヒューマンエラーによるバイアスの可能性
 - 一貫性の欠如
 - 膨大なコスト
 - ⇒**本報告**：機械による分類/コーディング
- 欧米（主に英語圏）中心の研究
 - 韓国を対象とする場合、Korea Herald、Korea Post、各新聞社の一部英訳記事のみが対象となり、バイアスの可能性↑
 - ⇒**本報告**：韓国語辞書を利用し、抗議イベントの特定、日付、地域、テーマなどを推定

質問・コメント（寺下報告）

1. 機械学習のメリットは？

- ヒューマンコーディングでもdouble/tripleチェックが一般的
- 一貫性が欠如しても、体系的な測定誤差でなければ、一致性は担保されるのでは？
- 機械学習を低コストで人間の仕事を代えるものか、人間を凌駕するものか。

2. 機械分類されたイベントが公的データのトレンドを追従することについて

- それでも非常に過小推定されている（数が重要なテーマだと…）。

3. 誤分類された記事の特徴は？ → 分類精度の改善へ

- トレーニングセット（質、量）、アルゴリズム、コーディングルール再考など
- 両者間のgapには地域差があるか（マッピングなどで確認）。

4. 図8：変化点分析（change-point analysis）の応用可能性（使用する分布は要検討）

5. 図9：時系列分解（トレンド、季節性、残差; STL分解）によって、より詳細な探索が可能に？

6. テーマのカテゴリーについて（現在、16項目）

- 最も注目度の高い政治（弾劾など）、外交（反米、反日など）はすべて「その他」？

7. 重複イベントを温存したデータの有効性（報道量の多さ≒当該イベントのインパクト?）



渡邊報告

概要（渡邊報告）

- **問い**：談合を正当化する言説（「良い談合」論）の中で、市民から支持されやすい論拠は何か。
- **方法**：インターネット・サーベイ実験（ヴィネット実験）＋線形回帰分析
- **答え**
 - 「品質維持」、「費用削減」は談合に対する不公正性を緩和する。
 - 「企業保護」は談合に対する不公正性を維持させる。
 - （談合に関する）知識量が多いほど、談合に対する不公正性を認識しやすい。

貢献・意義（渡邊報告）

- これまでの「良い談合」論
 - 「良い談合」論の歴史的経緯
 - 「良い談合」論の論拠の否定
- ⇒**本報告**：「良い談合」論の存在を所与とし、世論（≒ policy mood）への注目
 - 「良い談合」論の論拠：品質の維持、費用の削減、中小企業の保護
 - 何かの利益（品質、費用、企業）が予想される談合は支持されるだろうか。
 - ⇒ あまり論じられてこなかった問い

(a) 既存の研究		
	公正な手続き	不公正な手続き
良い帰結	☺	?
悪い帰結	?	☹

(b) 本報告		
	公正な手続き	不公正な手続き
良い帰結	☺	☺
悪い帰結	?	☹

質問・コメント（渡邊報告）

1. 追加分析について

- 条件付き処置効果がメインであるなら、交互作用を含むモデルを推定し、限界効果を確認すればよりクリア
- ただ、今の結果でも効果量は十分大きいことは（概ね）予想できる。

2. 共変量あり/なしモデルのサンプルサイズについて

- 欠損値を含むケースはlistwiseで除外されている（と考えられる）。
- 共変量なしモデルの場合、★が付きやすい。← Large Nのおかげ？
- ただし、両モデルを厳格に比較するためには、同じサンプルを使うべき？

3. 談合に関する知識測定について

- 具体的にどのような設問で知識を測定したか。
- ワーディングによっては、被験者に予め知識を植え付けたことになるかも
- 実験前後のランダム化？

質問・コメント（渡邊報告）

4. 予測値について

- 同じ効果量 ≠ 同じ含意
- 公正性評価が「30点から40点へ」 ≠ 「45点から55点へ」
- 予測値を出すことで右上のセルが具体的に分かるかも
 - 左下のセルも気になる：公正だが負の帰結 vs. 不公正だが正の帰結

(a) 既存の研究

	公正な手続き	不公正な手続き
良い帰結	😊	?
悪い帰結	?	😞

(b) 本報告

	公正な手続き	不公正な手続き
良い帰結	😊	😞? 😐? 😊? 😄?
悪い帰結	?	😞

5. 仮説3の適切さについて

- 仮説3はある意味「帰無仮説」で検証が困難